

六十年後にまた会う日まで

木村 留奈

「このお茶碗を使うのは最初で最後だわ。」

二〇二三年の初稽古で生徒の一人が言った。

「一度では勿体ないくらい立派ですね。」

「でも、だからこそその有難みもありますね。」

私にはまだ分からない価値を、景色を他の方は見ていた。それが、私にはどうしようもなく苦しかった。一緒にお稽古している方々は若くとも四、五十代がほとんどで、知識、経験共に二十歳の私の何倍も持っている。そんな方々とお茶室にいるのは、私にはあまりに場違いな気がしてならない。お点前や作法は複雑で、礼儀にも厳しい。良かれと思っただけのこと、実は失礼に当たることだったなんてこともある。私はいつも緊張の糸を張って、正解も分からずもがいていた。そんな中、「趣味なのだから無理をする必要はない」、「茶道をしなくても社会で困ることはない」という誰が言ったかも定かではない言葉が、氷砂糖のように甘く、今にも溺れてしまいそうな私を誘惑した。私はその日、七年続けた茶道を辞めようとしていた。まだ事情を知らない先生が、会話の輪に入れていない私に説明する。

「千支は十二支と、十千を組み合わせて六十年で一巡りするんですよ。そのうちの一つがこれのお茶碗に描かれている『癸卯』。だから、この中では多分あなただけです、もう一度このお茶碗でお茶を飲めるのは。」

そうか、六十年後にも生きていれば、今ここに誰よりも私は年長者になっているのだ。その頃にはもう、この茶碗の温かみのあるベージュも、正面に描かれた兎の繊細さも、滑らかなその感触も、もう正確には憶えていないだろう。八十歳の私はもう、お茶室にいないのだからそれでいい。お茶を辞めようと思ったはずなのに、その想像はなぜか冷たく私の心を刺した。その痛みに蓋をするように、抹茶を一口飲み下す。すると、想像よりも熱を持ったそれが食道を通って胃に入るのが分かった。お腹がふわりと温かくなり、口には抹茶のほのかな甘味と渋みが残った。思わず口元が緩む。それを見た先生が言う。

「今日のお抹茶は少し熱めに入れさせてもらいました。寒いですからね。でも、そのお茶碗は熱伝導が悪いから持ちやすいでしょう。熱伝導が良いとフライパンみたいになりやすからね。」

それを聞いてはっとした。お茶を点てる温度だけでなく、先生はそれを手に取った時のこ

とまで考えていたのだ。それは堅苦しい礼儀とは違う、相手を想った気遣いだった。ぼたりと、心に刺さった氷に温かなものが降ってくるような感覚がした。先生の思い遣りが私の心を溶かしていった。一つに思い至ると他の物も見え方が違ってくる。多めに炊かれた炭は私達の身体を温めるだけでなく、パチパチと燃える音で私達を癒すのだろう。寒い中、開けられた障子の向こうには、見事な赤い花が一輪咲いている。私はその花の名前をまだ知らないけれど、それはとても綺麗で、誰かに大切に育てられたのだろうということだけは分かった。心にぼたりぼたりと何か降り注いで溜まっていく。思いやりや感動やここに至るまでの辛かった日々など、様々な思いが募って表面張力を生み、私の中で歪ながらおもてなしの意味を成した。まるで霧が晴れたばかりの朝のように、私の目は冴えわたって、目の前にあるものが、今までとは比べようもないほど鮮やかに映った。お茶室にある全てが私の心に訴えてきて、今にも何か溢れだしてしまいそうだった。

先生がとぼとぼと湯を茶碗に注ぐ。それを建水に流すと、次は水を注いだ。ころころと音がした。ああ、湯と水は音が違うのだ。柄杓から最後の一滴がゆっくり落ちた。その音とは別に、ぼちゃんと音がした気がした。表面張力が切れる。数えきれない想いがとめどなく溢れる。どうしようもなく嬉しくて、切なくて、とにかく泣いてしまいたくなるような、叫びだしたくなるような、心揺さぶられる感覚が、私の胸を打ってやまなかった。

お茶室を出ると、私の心は洗い流されて妙にすっきりしていた。今は背伸びばかりで大変な時も、気づけない価値もたくさんある。けれど、私にも綺麗だ、素敵だと思える心はあるから、少しづつでもそれに気づいていけばよいではないか。辛いも、嬉しいも何もかも、心を動かされる感情は全て、自分の中に大切に溜めていこう。そうして、今は何気なく通り過ぎてしまうあらゆることに立ち止まって、感動できるようになれば、私の目に映る世界はもっと鮮やかになるだろう。何かにふと気が付いて、表面張力が切れる瞬間にも、もっとたくさん出会うには違いない。そう思うと、まだお茶を辞めるわけにはいかない。私はここで学び、いつかあの深紅の花の名前を知るのだ。そして六十年後、癸卯の茶碗に再び出会えたら、その時私は何に気づいて、何に心を動かされるだろうか。